様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１１日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００８　～２０１１
課題番号：２０３３０１８６
研究課題名（和文）音楽的リテラシーの育成を目指した保幼小中連携音楽カリキュラムの開発
研究課題名（英文）The development of an inter-school collaborative music curriculum from preschool through middle school designed to foster musical literacy

研究代表者
三村　真弓（MIMURA MAYUMI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：００３７２７６４

研究成果の概要（和文）：
本研究では、主として、幼稚園児・小学校児童・中学校生徒の音楽的リテラシーの実態調査、現在及び過去に行われた音楽的能力育成を目指した音楽教育指導法の分析と音楽的能力調査方法の分析を行った。その結果、音楽的リテラシーの発達の諸相、音楽的リテラシー育成のための必要条件等が明らかとなった。それらをもとに、音楽的リテラシーの育成を目指した小中連携の音楽科カリキュラムの試案作成を行った。

研究成果の概要（英文）：
In this study, an investigation on the actual conditions how much musical literacy children/students in preschool, elementary and junior high school have acquired was conducted; besides analyses of instruction methods in music education and investigative methods for musical ability were conducted.
As a consequence of the investigation and the analyses, it was revealed that the development of musical literacy has various aspects, and what the necessary conditions for fostering musical ability are.
On the basis of these findings, we designed a tentative music curriculum aimed at fostering musical ability in collaboration between elementary and junior high school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
２００９年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２０１０年度	2,200,000	660,000	2,860,000
２０１１年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
総　計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：音楽教育学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：各教科の教育（音楽）

１．研究開始当初の背景
本研究者たちは過去に、幼稚園、小学校、中学校において、様々な音楽的能力調査を行ってきた。音楽活動の量と質に差のある２つ

の園の子ども達の音楽的能力を調査し比較した結果、園における音楽活動の量的・質的な差が子どもたちの音楽的能力差に影響を与えていることが明らかになった。また、中学校入学直後の生徒を対象として、小学校学習指導要領「音楽」に内容として規定されている楽典的知識に関するテストと視唱能力の調査を行った結果、学校外で音楽の習い事をしていない生徒の、小学校学習指導要領の内容の到達度は低く、また視唱能力も非常に低いことがわかった。すなわち、小学校では小学校学習指導要領の内容を確実に習得できるような音楽科授業が行われていないのではないかということが示唆された。これらのことから、就学前教育における音楽活動のあり方の見直しと、小学校音楽科カリキュラムの見直し、及び小中連携の必要性が明らかとなった。

小中連携の試みは各地で行われている。児童と生徒の人的交流、教師の相互訪問や出張授業等にとどまらず、小中一貫カリキュラム作成の試み等も見られる。しかし実際には、小学校の教師の専門性の問題、教科書の使用を前提とするカリキュラム作成等、課題が多い。音楽科の教科書は、学習内容や音楽的能力の系統的育成を目指して構成されているわけではなく、題材や教材を中心に構成されているため、教科書に即した小中一貫カリキュラムの作成は難しいのである。以上のことから、就学前教育から中学校にかけて系統的に育成すべきものは学習内容や音楽活動ではなく、音楽活動の基礎となるものでなければならないことがわかった。

そこで本研究では、保幼小中連携の柱として音楽的リテラシーに着目することとした。音楽におけるリテラシーは、単に楽譜を読む力や楽譜を書く力を指すのではない。音高弁別力、音高再生力、聴唱力、視唱力を総合するものである。すなわち、聴いた音の高さを弁別し、同じ高さで正確に再生できる力、あるいは楽譜を見て何の音か認知し、さらにそれを正しい高さで再生できる力等を指す。この音楽的リテラシーはすべての音楽活動に必要なものであり、感性豊かな表現の基礎となるものである。

２．研究の目的

本研究は、音楽的リテラシーの育成を目指した、保幼小中連携の音楽カリキュラムを開発するための基礎的研究を行うことを目的とした。

３．研究の方法

研究の方法は大きく３つに分けられる。第１は、幼稚園児・小学校児童・中学校生徒の音楽的リテラシーの実態調査である。

第２は、現在及び過去の優れた音楽指導法と、音楽的能力調査方法に関する研究である。

第３は、音楽的リテラシーの育成を目指した小中連携の音楽科カリキュラムの試案作成と、音楽的リテラシー育成のための音楽指導法の提案である。

４．研究成果

(1)音楽的リテラシーの実態調査

幼稚園児を対象として行った歌声に関する調査では、幼児が一斉歌唱活動を行う際に、伴奏の有無、およびイヤホンで自分の声をモニターしながら歌うか否か、という異なる条件下で幼児個々の歌声がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。その結果、①正確な音高での歌唱は、イヤホンで自分の声をモニターすること、及び伴奏による音高の補助があることの２つの要素によって導かれること、②正確な音高での歌唱に密接に関わるのは、年少では自分の声をモニターする要素であり、年中及び年長では伴奏の要素であること、③G4 以上の高い音域よりも G4 未満の低い音域の方が正確な音高で歌唱できること、④どなり声の生起は一斉歌唱時に自分の声が聞こえにくい状況においてその生起率は高くなるが、年長になると伴奏の有無やイヤホンの有無といった条件への依存度が低くなり、どのような条件下でも比較的一定して歌声に近くなること、が明らかとなった。

上記と同様の調査を小学校児童を対象として行った結果、①イヤホンで自分の声をモニターしながら歌唱することによって音高がより正確になること、②イヤホンで自分の声をモニターしながら歌唱する際、低学年では伴奏有りの条件の方が音高が正確になるが、高学年では伴奏無しの条件の方が音高が正確になること、③「もっと大きく元気に歌って」という教師の教示は、低学年ではどなり声と不正確な音高の歌唱につながること、が明らかとなった。

小学校児童を対象として行ったサイレント・シンギングの調査では、児童がどの程度の内的聴覚力を保持しているか、その発達状態を明らかにすることを目的とした。その結果、学年をおってほぼ着実に得点が上がることがわかった。しかし、音楽の習い事経験の有無別に比較したところ、得点が上がっていたのは経験有群のみであり、経験無群の得点はほぼ横ばい状態であることが明らかとなった。

小学校児童を対象として行った階名聴唱課題における階名の認知力と音高の再生力に関する調査では、児童の聴唱力の発達の諸相を明らかにすることを目的とした。その結果、開始音にドが位置する課題と、順次進行する課題では、階名を認知しやすく、また再生しやすいことがわかった。

中学校音楽科授業を対象として行った研究では、対照的な３つの授業を取り上げ、「わかる」（認知）、「できる」（スキル）、「かんじる」（情意）がどのように関連し合っているのかを明らかにした。これによって、中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする教育プログラム開発への示唆が得られた。

中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目した研究では、表現や鑑賞の授業において、聴取した音楽表現や楽曲に対してどのような言葉で評価するのかを明らかにすることを目的とした。その結果、豊富で質の良い音楽的経験によって生徒の批評能力が向上することがわかった。また、鑑賞ポイントをしっかり把握させることによって生徒の鑑賞能力が向上することがわかったが、同時に鋭い聴取力を育成することの必要性も明らかになった。

中学校１年生を対象として行った聴取力を中心とした音楽科学力調査では、小学校修了程度の内容がどの程度獲得されているのかを明らかにすることを目的とした。その結果、拍子を聴き分ける力、速度を聴き分ける力、聴取した音と楽譜を照合する力はかなり育っていることがわかった。それらに比べて、長調・短調を聴き分ける力は、やや成績が低かった。また、楽器の音色を聴き分ける力は、楽器によって正答率にかなり差があることがわかった。

中学校１年生を対象として行った音楽を感受する能力調査では、音楽的内容の異なる楽曲を聴いて、生徒がどのような印象を感受するのか、またそれには音楽的経験の有無がどう影響するのかを明らかにすることを目的とした。その結果、被験者が 14 の評価語を含む単極評価法を用いて、大きな矛盾なく音楽の印象を評価していることがわかった。また音楽経験有無別に印象評価を比較した結果、音楽経験有群の方が音楽経験無群よりも比較的明確に印象を評価する傾向にあることもわかった。

以上の研究から、音楽的リテラシー発達の諸相の一端、及び育成カリキュラムの要件が明らかとなった。

(2)現在及び過去の優れた音楽指導法と音楽的能力調査方法に関する研究

1) ハンガリーにおけるコダーイ・コンセプトに基づいた音楽指導法に関する研究

ハンガリーから連携研究者である Pajor Márta 女史を招聘し、コダーイ・コンセプトに基づいた音楽教育の理念と指導法の講演会と、ワークショップを開催した。これによって、音楽的リテラシーを育成するための音楽指導法について示唆が得られた。

2) 「二本立て方式による音楽教育」に関する研究

戦後の優れた音楽教育の１つである「二本立て方式による音楽教育」に関する研究では、北海道音楽教育の会の二本立て方式による音楽教育に着目した。二本立て方式とは、豊富で多様な音楽経験をさせる A 活動と、音楽的能力を系統的に育てる B 活動を１つの授業内で並行して行うものである。1960 年代から 1970 年代にかけて、全国的に二本立て方式が衰退していく際に、北海道音楽教育の会の二本立て方式はさまざまな批判をあびることとなった。彼らはそれらの批判を克服するために、コダーイ・システムの指導法を取り入れ、多彩な遊びの要素を B 活動に取り入れることによって、訓練の様相を打破し、基礎を体得させる指導法に改善していった。

3) 「ふしづくり一本道」に関する研究

戦後の優れた音楽カリキュラムである「ふしづくり一本道」に関する研究では、昭和 40 年に岐阜県で作成された『小学校　音楽学習指導の手引き（音楽感覚段階別能力表）』を手掛かりに、ふしづくりの音楽教育の萌芽期における特徴を明らかにすることを目的とした。本冊子には、６段階の「小学校音楽感覚段階別能力表」と 15 段階の「創作の指導段階（創作指導の一本道）」が記載されている。前者では、音楽的感覚に関わる音楽の諸要素がすべて項目に挙げられ、特にメロディ、リズム、ハーモニーは、段階をおって系統的に育成される内容となっていた。第 6 段階で創作の活動に入るのは、メロディの項目のなかの聴音記譜と問答唱奏におけるふしづくりと、ハーモニーの項目のなかの和音感における和音づけのみであり、創作指導に力を入れているとは言いがたい。指導法の特徴は、常に活動を主体として主体的に音楽と関わらせること、身体反応を伴わせること、記号や線や○や擬音などを用いて指導法をさまざまに工夫すること等であった。一方、後者の「創作の指導段階（創作指導の一本道）」は、後の「ふしづくり一本道」の原型であると考えられるが、「ふしづくり一本道」のカリキュラムと比較すると、ふしづくりとしての計画性は低く、どちらかといえば、子どもの音楽的感覚や音楽的能力を育成するためのカリキュラムという性質が強かったと考えられる。

4) 音楽科学力調査に関する研究

小学校を対象として全国規模で行われた昭和 33 年度と昭和 41 年度の音楽科学力調査と、平成 20 年度に小学校と中学校のそれぞれ 3,000 人ずつを対象として行われた特定の課題に関する調査（音楽）を比較・検討した。その結果、昭和 33 年度と昭和 41 年度の調査では、音楽的感覚、聴取力、及び読譜力・記譜力等が音楽科の学力として求められていたことがわかった。しかし、平成 20 年度の調査では、それらが非常に希薄になっている

ことが明らかとなった。求められているのは、音楽の要素や楽曲の構成を手掛かりとした、曲想の工夫や、よさや美しさを味わって聴く力であった。

岐阜県小学校音楽科における音楽能力調査に関する研究では、昭和 40 年代に作成された「小学校音楽感覚段階別能力表」及び音楽感覚テストと、平成元年度に作成された「基礎能力表」及び実音テストの内容から、岐阜県教育委員会や岐阜県小学校音楽部会がどのような音楽的能力を求めていたのかを明らかにした。その結果、岐阜県で求められていた音楽的能力は、主として聴取力と音楽的感覚であったことがわかった。

以上の 1)～4)の研究から、音楽的リテラシーの中心となるものは、音楽的感覚と聴取力と内的聴覚と音楽的記憶であることが明らかとなった。それらを育成するためには、通常の音楽科授業で行う表現や鑑賞の活動とは独立した音楽的リテラシー育成のための系統的なプログラムが必要であることがわかった。すなわち、二本立て方式である。二本立て方式の B 活動では、訓練的な要素を排除するために、多彩な音楽活動を通して、身体反応や比喩的表現を用い、遊びの要素を有する指導法が効果的であることがわかった。

(3) 音楽的リテラシーの育成を目指した小中連携の音楽科カリキュラムの試案作成と、音楽的リテラシー育成のための音楽指導法の提案

(1)～(2)の研究成果をもとに、音楽的感覚育成のための指導法、音楽的記憶を高めるための指導法、内的聴覚育成のための指導法、聴取力育成のための指導法等を考案した。さらに、音楽的リテラシーの育成を目指した小中連携の音楽科カリキュラムの試案を作成した。関心・意欲・態度、できる（技能）、かんじる（感受）、わかる（知覚、知識）、価値づける、の項目別に小学校１年生から中学校３先生までの９段階において、達成すべき内容やねらいを明示した。小学校段階では主として音楽の諸要素の知覚（音楽的感覚の育成）をめざし、中学校段階ではそれらの能力を駆使して、要素同士のさまざまな関係を学習する内容となっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 32 件）

1. 三村真弓・吉富功修、岐阜県小学校音楽科における音楽能力調査に関する研究、教育学研究紀要(CD-ROM 版)、57 巻,査読無、2012、pp.416-421
2. 吉富功修・三村真弓・伊藤真、わが国の小学校音楽科における学力測定方法の開発、教育学研究紀要(CD-ROM 版)、57 巻、査読無、2012、pp.209-214
3. 吉富功修・三村真弓、「ふしづくりの音楽教育」の衰退と山本弘の主張、音楽文化教育学研究紀要、24 巻、査読無、2012、pp.1-10
4. 三村真弓・吉富功修・四童子裕、北海道音楽教育の会の「二本立て方式による音楽教育」に関する研究－1960 年代から 1970 年代の活動を中心に－、音楽学習研究、7 巻、査読有、2012、pp.67-76
5. 光田龍太郎・伊藤真・三村真弓、中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究－音楽を感受する能力測定方法の検討－、学部・附属学校共同研究紀要、40 号、査読無、2012、pp.165-170
6. 泉谷正則・向井さゆり・大橋美代子・三村真弓・濵本恵康、習得から活用、探求への音楽科学習マネージメントサイクルの研究開発（３）、学部・附属学校共同研究紀要、40 号、査読無、2012、pp.243-248
7. 三村真弓、岐阜県における「ふしづくりの音楽教育」萌芽期の特徴－『小学校　音楽学習指導の手引き（音楽感覚段階別能力表)』を手掛かりとして－、広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部、60 号、査読無、2011、pp.283-291
8. 四童子裕・三村真弓・吉富功修、戦後の日教組教育研究全国集会の音楽（芸術）分科会における実践報告の変遷－『日本の教育』を中心に－、音楽文化教育学研究紀要、22・23巻、査読無、2011、pp.149-157
9. 三村真弓・吉富功修、わが国における音楽科学力調査に関する研究、教育学研究紀要（CD-ROM版)、56巻、査読無、2011、pp.625-630
10. 伊藤真・三村真弓・金岡美幸・林よし恵・松本信吾・久原有貴・湯川慶子・池田明子・吉原知惠美・掛志穂・君岡智央・中山芙充子・井上由子・坪田志保・山中覚美・東加奈子・宮谷智子・川﨑智浦、幼児の音楽的能力の育成に関する基礎的研究（１）－一斉歌唱活動時における幼児の歌声に着目して、学部・附属学校共同研究紀要、39 号、査読無、2011、pp. 105-110
11. 三村真弓・伊藤真・大橋美代子・近藤知美・福田秀範・向井さゆり・神野正喜・松田道枝・川村恭子、音楽リテラシー育成のための基礎的研究（３）－サイレント・シンギングに着目して－、学部・附属学校共同研究紀要、39 号、査読無、2011、pp. 147-152
12. 三村真弓・伊藤真・泉谷正則・桑田一也・原寛暁・増井知世子・松前良昌・光田龍太郎・藤井恵子、中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究（１）－聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして－、学部・附属学校共同研究紀要、39 号、査読無、2011、pp. 153-158

13. 桑田一也・大橋美代子・泉谷正則・向井さゆり・三村真弓・濵本恵康、キーコンピテンシーを中心に据えた習得から探求への学習マネージメントの研究（２）、学部・附属学校共同研究紀要、39 号、査読無、2011、pp. 213-218
14. 吉富功修・三村真弓、小学校音楽科の学力に関する研究（２）－音符・休符・記号等の理解－、環太平洋大学研究紀要、3 巻、査読無、2010、pp.25-32
15. 桑田一也・大橋美代子・三村真弓・濵本恵康、キーコンピテンシーを中心に据えた習得から探求への学習マネージメントの研究開発、学部・附属学校共同研究紀要、38 号、査読無、2010、pp.229-234
16. 三村真弓・増井知世子・原寛暁・徳永崇、学習者の自己評価・相互評価による学力向上を目指した音楽科授業計画（４）、学部・附属学校共同研究紀要、38 号、査読無、2010、pp. 247-252
17. 三村真弓・吉富功修・大橋美代子・青原栄子・高旗健次・金岡美幸・池田明子・吉原知惠美・掛志穂・君岡智央・中山芙充子・井上由子・坪田志保・山中覚美・東加奈子・宮谷智子、幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究（３）－斉唱時における子どもの歌唱能力の発達に着目して－、学部・附属学校共同研究、38 巻、査読無、2010、pp.87-92
18. 三村真弓・河邊昭子・福田秀範・中村将之・青原栄子・大橋美代子・吉富功修・徳永崇・長澤希、音楽リテラシー育成のための基礎的研究（２）－小学校音楽科教科書のカリキュラムの検討を中心に－、学部・附属学校共同研究、38巻、査読無、2010、pp.143-148
19. 三村真弓・光田龍太郎・松前良昌・桑田一也・吉富功修・高旗健次・藤井恵子、中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（３）－中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目して－、学部・附属学校共同研究、38巻、査読無、2010、pp.167-172
20. 吉富功修・三村真弓、小学校学習指導要領・音楽科に示された音符・休符・記号等の知識の習得状況－小学校音楽科における学力の一環として－、音楽教育学、39巻2号、査読無、2009、pp.29-31
21. Pajor Márta・Szirmai Monika・三村真弓、ハンガリーの音楽教育－コダーイ・コンセプト－、音楽教育学、39巻2号、査読無、2009、pp.32-36
22. Pajor Márta・Szirmai Monika・三村真弓、コダーイ・コンセプトに基づいた音楽指導、音楽教育学、39巻2号、査読無、2009、pp.37-38
23. 三村真弓、音楽リテラシーの育成をめざした音楽科授業、学校教育、1108号、査読無、2009、pp.12-17
24. 三村真弓、基礎的・基本的な知識・技能の習得を基盤とした、思考力・判断力・表現力等の育成へ、学校教育、1108 号、査読無、2009、pp.32-35
25. 三村真弓、言語力の育成をめざしたこれからの教科教育－音楽科授業における言語力とは何か－、日本教科教育学会誌、31巻4号、査読無、2009、pp.43-46
26. 吉富功修・三村真弓、小学校音楽科の学力に関する研究（１）－音符、休符、記号等の理解を中心として－、環太平洋大学研究紀要、2号、査読無、2009、pp.85-94
27. Mimura, M., Kitano, S., Yoshitomi, K., Takeuchi, H., Singing abilities of kindergarten and elementary school children: Assessment of the vocal pitch matching abilities, *Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education,* Vol.3, No.1, 査読有, 2009, pp.29-52
28. 三村真弓・増井知世子・原寛暁・徳永崇、学習者の自己評価・相互評価による学力向上を目指した音楽科授業計画（３）、学部・附属学校共同研究紀要、37号、査読無、2009、pp. 407-412
29. 三村真弓・光田龍太郎・桑田一也・松前良昌・高旗健次・藤井惠子、中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（２）、学部・附属学校共同研究紀要、37 号、査読無、2009、pp. 99-108
30. 三村真弓・青原栄子・高旗健次・金岡美幸・大橋美代子・池田明子・吉原智恵美・掛志穂・君岡智央・中山芙充子・井上由子・山中覚美・東加奈子・有村由香、幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究（２）－斉唱時における子どもの歌唱実態に着目して－、学部・附属学校共同研究紀要、37 号、査読無、2009、pp.145-150
31. 三村真弓・河邊昭子・徳永崇・青原栄子・大橋美代子・福田秀範・中村将之・宮﨑将三、音楽リテラシー育成のための基礎的研究（１）－階名聴唱課題における階名の認知力と音高の再生力に着目して－、学部・附属学校共同研究紀要、37 号、査読無、2009、pp.93-98
32. 三村真弓、音楽リテラシー育成の必要性－音楽科の確かな学力の基礎として－、学校教育、1092 号、査読無、2008、pp.32-35

〔学会発表〕（計 14 件）
1. 吉富功修・三村真弓、ふしづくりの音楽教育への胎動、日本音楽教育学会中国四国地区例会、2012.3.3、高知大学

2. 三村真弓、ハンガリーの幼児音楽教育に学ぶこと、環太平洋乳幼児教育学会日本支部2012年研究会、2012.2.18、神戸大学
3. 三村真弓・吉富功修、岐阜県小学校音楽科における音楽能力調査に関する研究、中国四国教育学会第 63 回大会、2011.11.20、広島大学
4. 吉富功修・三村真弓・伊藤真、わが国の小学校音楽科における学力測定方法の開発、中国四国教育学会第63回大会、2011.11.19、広島大学
5. 吉富功修・三村真弓、「ふしづくりの音楽教育」の衰退の要因と山本弘の音楽教育観、日本教科教育学会第 37 回全国大会、2011.11.12、沖縄大学
6. 三村真弓・吉富功修・四童子裕、北海道音楽教育の会の「二本立て方式による音楽教育」に関する研究、第7回音楽学習学会研究発表大会、2011.8.29、関西学院大学
7. Shin Ito, Mayumi Mimura, Katsunobu Yoshitomi, Kaoru Shidoji, Yoshifumi Nomi, A Study on the Development of Singing Ability in Young Children Singing in Unison, PECERA、12th Conference、1st August 2011, Kobe Japan
8. 三村真弓・吉富功修、わが国における音楽科学力調査に関する研究、中国四国教育学会第62回大会、2010.11.21、香川大学
9. 四童子裕・三村真弓・吉富功修、戦後の日教組教育研究全国集会の音楽（芸術）分科会における実践報告の変遷－『日本の教育』を中心に－、日本教科教育学会第 36 回全国大会、2010.10.2、弘前大学
10. 三村真弓・吉富功修、1960年代から1970年代における「二本立て方式による音楽教育」の盛衰に関する研究－北海道音楽教育の会の活動を中心として－、日本教育学会第69回大会、2010.8.21、広島大学
11. Mayumi Mimura, Katsunobu Yoshitomi, Shin Itou, Nien-Tzu Chao, Fei Wu, A cross-sectional study of the development of singing ability in children singing in unison - focusing on with or without musical accompaniment or performance feedback, PECERA, 11th Conference, 26 July, 2010, Venue in Aigrette Bay Narada Holiday Hotel , Hangzhou, China
12. 吉富功修・三村真弓、小学校学習指導要領・音楽科に示された音符・休符・記号等の知識の習得状況－小学校音楽科における学力の一環として－、日本音楽教育学会第 40 回大会、2009.10.3、広島大学
13. 三村真弓、言語力の育成をめざしたこれからの教科教育－音楽科授業における言語力とは何か－、日本教科教育学会第 34 回全国大会シンポジウム、2008.12.7、宮崎観光ホテル
14. Mayumi Mimura, Hiroaki Takeuchi, Katsunobu Yoshitomi, Sachiko Kitano, Singing Abilities of Preschool and Elementary School Children: Assessment of the Vocal Pitch Matching Abilities, Pacific Early Childhood Education Research Association 9th Annual Conference, July 8, 2008, Chulalongkom University, Bangkok Thailand

〔図書〕（計3件）
1. 三村真弓、ふくろう出版、改訂　幼児の音楽教育法－美しい歌声をめざして－、2011、pp.58-64、78-86
2. 三村真弓、ふくろう出版、小学校音楽科教育法－学力の構築をめざして－、2010、pp.92-96、113-118、126-127
3. 三村真弓、北大路書房、遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術－実践力の向上をめざして－、2009、pp.36-40

６．研究組織
(1)研究代表者
三村　真弓（MIMURA　MAYUMI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：００３７２７６４

(2)研究分担者
吉富　巧修（YOSHITOMI　KATSUNOBU）
広島大学・大学院教育学研究科・名誉教授
研究者番号：２００８３３８９

北野　幸子（KITANO　SACHIKO）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：９０３０９６６７

水﨑　誠（MIZUSAKI　MAKOTO）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０３７４７４９

藤原　志帆（FUJIHARA　SHIHO）
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０３８１０２２

伊藤　真（ITOU　SHIN）
広島大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：７０４５５０４６

小長野　隆太（KONAGANO　RYUUTA）
鈴峯女子短期大学・保育学科・講師
研究者番号：６０４５２６０３